

ランチョンセミナー 14

平成26年5月18日（日） 12：15～13：05

第2会場（朱鷺メッセ 4F 国際会議場（マリンホール））

東日本大震災被災者の動脈硬化：新たな動脈硬化検査の可能性

講演者：榛沢 和彦（新潟大学大学院医歯学総合研究科呼吸循環外科学分野（第二外科）講師）

座長：渡邊 博昭（J A 新潟県厚生連水原郷病院検査科）

共催：日本光電工業株式会社

現在、三陸沿岸被災地では復興が進みつつあるが一樣ではなく地域によって大きな差がある。それが被災者の生活環境にも影響し復興が進んでいない地域で今でも深部静脈血栓症(DVT)が多く認められ、高血圧も多い。このことは未だ被災地支援が必要であることを如実に示している。新潟県中越地震被災地での長期観察検討から震災後にDVTを認めた被災者で脳梗塞、心筋梗塞などの発症が統計的に有意に多いことが判明している。したがってDVTが多い被災地域では動脈硬化性疾患も多い可能性がある。そこで岩手県の仮設住宅団地におけるDVT検診では血圧測定、採血によるNT-proBNP値測定、そして可能な限り脈波伝搬速度(PWV)を測定している。その結果、DVT陽性率の高い仮設住宅団地では高血圧割合多くNT-proBNP高値割合も多かった。しかしPWVは高値がほとんどで差別化できずNT-proBNPとの相関も認められなかった。またPWVは検査に時間がかかるため検診受診者の10%程度しか施行できなかった。PWV高値が多いことは被災者の動脈硬化進行が疑われたがこれ以上の検査は時間的に不可能であった。一方、上腕マンシエット加圧による圧波形変化から動脈の反射波を検出しarterial velocity pulse index (AVI)と上腕の圧容積変化からarterial pressure volume index (API)を測定できる装置が経産省等の支援で開発された。これは血圧測定とほぼ同じ方法により約2分間で測定可能であり、簡便な新たな動脈硬化指標として国際標準化が期待されている。またこれを被災地検診で用いることにより被災者の動脈硬化診断及び疾病予防に寄与することが期待される。本セミナーでは被災地の健康環境現状とこれまでの動脈硬化検査の長短を踏まえて新たな指標について考察する。